

第 17 回日本在宅医学会大会 講演 抄録集・ホームページ掲載用原稿

講演テーマ		認知症ケアの根幹を見つめる			
開催日	2015 年 4 月 26 日(日)	時間	13:40-15:40	収容人数	350 名
講師情報	ふりがな	姓	ほんだ	名	みわこ
	名		本田		美和子
	所属	国立病院機構東京医療センター			
	部署	総合内科	役職	医長	

演題名(80 字以内)

優しさを伝えるケア技術：ユマニチュードの実践

ご略歴(300 字以内)

1993 年 筑波大学医学専門学群卒業、国立東京第二病院（現・国立病院機構 東京医療センター）内科、医療法人鉄蕉会・亀田総合病院 総合内科、米国トマスジェファソン大学 内科、米国コーネル大学老年医学科等を経て、2011 年 国立病院機構東京医療センター 総合内科医長

講演概要(1000 字以内)

人口の高齢化は様々な問題を引き起こしている。加齢による認知機能の低下が進行するにつれ、自分が受けているケアや治療の意味が理解できず、ケアの拒絶もしくはケアを実施する者に対する暴言・暴力行為などを表出する高齢者は多い。

そもそも現在の医学・看護学は、「治療の意味が理解でき、検査や治療に協力してもらえる人」を対象とすることを前提にしているが、認知機能が低下した方々に関しては、その前提条件が必ずしも得られないことに医療の現場は困惑している。提供される医療行為やケアが自分のためと理解できず、自己に対する侵襲ととらえる人々に、ケアを行う者は疲弊し職場を立ち去るなど、看護・介護人材の離職にも直結している。ケア困難となる状態は、高齢者の生活の質を保つことができず、同時に高齢者・ケア提供者双方に心理的ストレスを生じさせている。認知症の行動・心理症状の増悪は、周囲環境からのストレスが契機となっており、ストレスを感じさせないケアの重要性が高齢者ケアにおいて認識され始めている。とくに慢性疾患を抱える高齢者を対象とする在宅医療においてその要請は高い。

知覚・感情・言語による包括的なケア技術ユマニチュードはフランス発祥の 35 年の歴史をもつが「ケアをする人とは何か」「人とは何か」ということを常に考え、「見る」「話す」「触れる」という歴史的に重要とされてきたケアの要素を徹底的に行う。ケアの要素およびすべてのケアに共通するシーケンスの基本技術教育を行うことによって、ケア困難者の拒否的行動が減少し、本人のみならずケア提供者双方のケアに対する満足度がそれぞれ上昇していることや、看護師が自己技術の向上を自覚し、職務に関する満足度も増加するとなどのアウトカム研究および質的研究の報告がある。本シンポジウムではこの基本的な概念と具体的な技術に関して紹介し、今我々が迎えている高齢社会をより良いものとしていくための方策について考えていきたい。